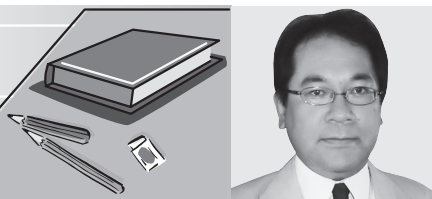


学生時代と図書館 77

一居場所を与えてくれた図書館

相川真佐夫



学生時代、自慢できる図書館との思い出はなく、はっきり言って恥ずかしい。しかし、図書館を利用しなかったわけではない。特に留学時代は図書館にお世話になった。朝7時の開館と同時に入り、夜12時の閉館時に図書館を出る。その後は寮に戻りさらに勉強する。今回はそんな北アイオワ大学で過ごした日々を学期ごとに思い出してみたい。

＜第1学期＞ 私の専攻はTESOL（英語教育）である。講義は内容と英語の両面についていくのに必死だった。専門用語だらけの講義は不安で、毎回テープに録音した。授業後は図書館に移り、ノートに空白を埋めていった。私は1階の辞書付近にあった畳一畳分の机をほぼ毎日独占した。インターネットのない時代、日本から持ちこんだ分厚い言語学、教育学の事典、参考図書を机いっぱい並べ、ハンディを乗り越えようと、勉強に勤しんだ。やがて、このノートは米人同級生の参考書となり、ノートを求める人影が現れるようになった。図書館は一留学生に勉強場所と自信を与えてくれた。

＜第2学期＞ 講義内容が益々抽象的、理論的になり、日本語に置き換えて考えることがほぼ不可能となった。リーディング量もペーパーもプレゼンも前学期から倍増し、もはやテープの再生復習は追いつかない。この学期は、地下1階の棚付一人用机が私の居場所となった。人気のないこの場所は雑音をシャットアウトし、リーディングに集中するのに好都合の場所であった。しかし、私の性格上、静寂状態の勉強だけでは気が狂ってしまう。勉強の間に日本の友人へ手紙を書くのが息抜きとなった。物思いにふけったりもした。図書館はそんな「隠れ家」を提供してくれた。

＜サマーセッション＞ 学期中は夜12時まで図書館は開館しているが、夏は17時までしか開いていない。毎晩12時まで図書館にいた私は、夏の間、TESOL Reading Roomという部屋を図書館代わりに陣取った。専門書が四方の書棚

にびっしりと陳列されている部屋である。その部屋で偶然、アイオワを薦めてくださった恩師の修士論文を発見し、「私も頑張らなくては」と、心が高揚した。実は失恋と前学期の成績不調に精神的ダメージを受け、最悪の状態であった時期である。この頃、論文を読む際、上下の空きスペースに親友から贈られた言葉「青春に地獄を見た者は強い」を書き、自分に呪（まじな）いをかけながら勉強したものである。ストイックになれる修行場をこの部屋は提供してくれた。

＜第3学期＞ 修士論文のため、文献を探し、入手しては読み、大事なところを書きとめ、ファイルに整理し、そういう作業を何度も繰り返す生活となった。今のようにノートパソコン1台とインターネットがあれば、もっと効率よくまとめられただろうに。便利だったのは、図書館にない文献資料を他大学の図書館から無料で調達できたことである。ただ、この学期、図書館の居場所を思い出せない。Student Unionが居場所となっていたからである。台湾人仲間と接することで授業以外は全て中国語で過ごした日もある。英語が嫌になっていた私は、飲食可能なUnionで中国語のお喋りに没頭し、現実逃避で図書館から足が遠のいた。

＜第4学期＞ 第3学期で課程修了の予定だったが、論文だけを残してしまった。前学期の反省から再び図書館に居場所を移した。2階に大学院生用の専用ブースがあり、台湾人の親友とシェアして使うことになった。それでも、勉強だけに終始する生活は私の性格が許さない。留学生会の会長だった私は、論文を一方で書きながら、ここでイベントの企画書も作った。留學生活の最終章を図書館は見守ってくれた。

以上、米国留学時代を振り返ってみた。本来の図書館の利用方法と違うので恥ずかしいが、今の私があるのも居場所を与えてくれた図書館のお陰であることは間違いないと信じている。

あいかわ まさお（准教授・英語教育）